

オリジナルの大切さ『新島襄全集』入門と同志社社史資料センター紹介

大鉢 忠	同志社大学工学部教授
講師紹介【おおはち・ただし】	【研究テーマ】 窒化物半導体とシリコン半導体のハイブリッドデバイス製作

オリジナルの大切さ

『新島襄全集』入門と同志社社史資料センター紹介

新島先生の資料について

おはようございます。副題にありますようなことをお話ししながら、大学一年生の皆様へ、オリジナルの大切さをお伝えしたいと思います。オリジナルは独創という意味にわかれ工学部の者は考えますが、もう一つは原点という意味も持っておりまして、その二つを掛けまして、同志社スピリット・ウィークにふさわしいように同志社の原点になる話をさせていただきます。

私は工学部電気工学科所属で、電気電子材料を専門としています。身近な話でいきますと、携帯電話やパソコンの心臓部となる電子回路を構成する半導体が専門で、最近、世間で話題になりました青色発光ダイオードで知られる窒化ガリウムGaNをクリーンルーム内の分子線エビタキシ-MBE装置で作る研究に携わっています。工学部で目標としている「創造教育」を目指し、新しい発明となるオリジナルな研究や仕事をするに努めています。Doshisha Spirit Week 2005で原点（オリジナル）、独創的（オリジナル）について考えてみたいと思います。

それには同志社大学の原点として新島襄をあげなくてはなりません。私の話の副題にあげました『新島襄全集』は新島先生に関するあらゆる資料を含んだ全十巻におよぶものです。その資料収集を思いつかれ、始められた方がおられました。もう亡くなられたのですが、九十六歳までお元気で講演もされた森中章光という先生がおられまして、その先生が新島先生の手紙などを非常に苦勞なさって、戦災で焼ける前にお集めになりました。また関東大震災の火災の時に即対応して資料集めをなさいました。それら新島資料をまとめる企画が同志社大学百周年記念としてスタートし、八年後の一九八三年に『新島襄全集』が刊行され始めました。分厚い本で十巻を家に置くのも大変なものです。図書館などでご覧になれます。ちなみにこの全集発行には最終巻の第七巻の出版をもって完成されたのが一九九六年ですから、十三年もかかっています。当初は一巻ずつ、隔月に一回出版ということで計画されたのですが、第六巻が新島先生が書かれた英文書簡集で、最終の第七巻は新島先生関係の英文資料と約十通の英語の手紙で構成されたものです。これらの英文編集に時間がかかりました。印刷された英文の手紙は普通に読めますが、手書きの手紙を判読して原稿にすることは大変な作業でした。当時オーティス・ケリー先生がおられて、その先生が苦勞をされて、北垣宗治先生もお手伝いされましたが、かなり時間を要した訳です。日本語の手紙を活字にする編集も同様大変な作業でした。最初につくる時はそれだけの時間が必要とは思いませんから、勝手なスケジュールで二カ月に一回発刊しようということになったのだと思います。当時社史資料室という所で『新島襄全集』の編集を進めました。昨年、この社史資料室は副題に取りあげました組織的に部に相当する独立した同志社社史資料センターとなりました。第八巻は年譜編で新島先生の生涯の出来事が日毎に整理され、その根拠となる文献や資料が記されているユニークなものです。新入生の皆様へ推薦したいのは第十巻『新島襄の生涯と手紙』です。新島先生が亡くなってすぐに、お世話になったハーディーさん（アルフィアス・ハーディー）の息子さんのアーサー・シャーバン・ハーディーさん（ダートマス大学で数学の教授をされていた）が、新島先生がハーディーさんたちに送られた手紙を中心に新島先生の英文の日記やノートなどを用いてLife and Letters of Joseph Hardy Neesimaという新島伝を出版されました。それが一九八〇年に同志社大学が新島先生没後九十周年を記念して復刻版として出版しましたものを北垣宗治先生が日本語訳されたものが第十巻です。

今出川キャンパスにある社史資料センターには新島先生のオリジナルの色々な資料、情報があります。大学のホームページからここへアクセスしていただくこともできます。ホームページ左のメニューに同志社大学の紹介というのがあり、「同志社大学の精神」に入ってくださいと同志社アーカイブス（新島遺品庫）（http://joseph.doshisha.ac.jp/ihinko/index.html）にいろんな写真等が入っており、見ることができます。

スライドを用いまして紹介していきます。同志社大学は、新島襄、山本覚馬、デイヴィスの三名の結社により英学校として開校したのに始まります。（図1）ここにお二人の肖像画があります。新島先生の肖像画は後でお見せします。デイヴィス先生は、体育館にデイヴィス記念館という名前が付いています。残念ながら山本覚馬先生の名前のものはありません。

（一）「新島」の読み

漢字や英語で文章に書かれたものが、どのように読まれるかは、最初はわれわれにはわからないわけです。録音されていると、どのように発音されているかわかりますが、どのように書かれるかはわかりません。歴史的なものに関しましては昔は文字として記録され、その後は口伝で読み方を伝承されました。伝承する人が私見を入れてしまうとその時点からオリジナルの発音が失われます。間違ってそれがそのまま読み方として伝わってしまうのではないかと思います。私は一九七七年から七八年まで、イギリスのパスという町にあるバース大学で在外研究を行っていたのですが、その近くの町で、Reading（リーディング）と書いた町があります。これを向こうの方は「レディング」と読まれました。その土地でないレディングと読むのはわからなかったと思います。あるいはわれわれの姉妹校であり、新島先生が出ましたアーモスト・カレッジのある町は、アーモストといわれますが、Amherstはアマストとか、アムハーストとか、われわれと異なる読み方をされる方もおられます。でも同志社では新島先生以来アーモストという読み方をしているということです。

それで肝心の新島先生に関しましては、私は新島襄（ニイジマジョウ）と申しましたが、ご本人はニイシマと読んでほしかったようです。暗いので少しわかりにくいですが、英文の手紙で、‘Neesima’（ニイシマ）と書かれています。（図2）これは函館から上海へ行くときのベルリン号の中で書かれた手紙のものでして、新島先生が書かれた最初の英語の手紙です。ここでいつも入学式の時に読めます「同志社大学設立の旨意」で「元治元年に函館を出て」と。漢字では元治と書きまして、皆さんガンジガンネンと発音なさっているのではないかと思います。ところがここに‘ganti’とガンチと書いてあるのです。ですからその当時、他の方はどのように読んでおられたかわかりませんが、新島先生が‘ganti’（ガンチ）と発音されて、‘gantii’と書いておられる訳です。けれども今歴史の方でこれをどう読むかといった時にゲンジという読み方があるのではないかと思います。

新島先生のニイシマということに戻りますと、当時同志社ができて四年を経た一八七九年から教授会（Faculty Meeting）ができ、その時の手書き英文記録が昨年復刻されました。Doshisha Faculty Record（DFR）1879-1895（松井全・児玉佳典復刻）北垣宗治（監修・解題）の中に新島先生のことをNeesima以外にNiijimaと書かれている箇所があり、この当時から他の方はニイジマと呼んでおられた可能性があります。ご本人のサインにはNeesimaニイシマと書かれています。また新島先生の幼名を「七五三太」と書いてシメタと読むことは皆さんよくご存知ですが、新島先生が英語の文章の中で、ローマ字で‘Shimetata’と書かれたので、「七五三太」と書いてシメタと読んでいます。しかしそういう記録がなければ七五三太でシメタとはなかなか読めないのではないかと思います。

（二）英語と日本語訳

日本語訳について、これはオリジナルのものを訳しますので、その段階で訳者の意思が入ってしまいます。「自由教育」という四文字熟語があります。この同志社大学のいろいろな書物に自由教育ということが出てきますが、この四文字熟語は、大学設立募金運動に奔走していた新島先生（四十六歳）が東京において同志社英学校の五年生横田安止（やすただ）からの手紙に対しての返信を出された明治二十二年（一八八九）年十一月二十三日付けの達筆な書簡がありまして、その結びの中に「小生畢生之目的ハ、自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳、小生之心情御洞察可被下候、先は貴答迄・・・」と記されています。

実はこれと同じ意味をもったポスターが存在していることがわかりました。“Free education, self-governing churches, these keeping equal step, will bring this nation to honor.”（図3）ここにジョセフ・ハーディー・ニイシマとありますが、これが先ほど言いましたNeesimaです。ハーディーさんは、ニイシマをジョセフと呼ばれていました。船長さんからジョウと英語の名前を付けてもらったことからこの名前がつけられました。ボストンでお世話になったハーディーさんの名前もミドルネームに付け、英語ではジョセフ・ハーディー・ニイシマが新島襄の名前になっているのです。

アメリカのマサチューセッツ州セイラムにあるビーボディー博物館に新島先生のアンドーヴァー時代の遺品が残されていますが、その中の一つに写真のようなほぼA3判大の一枚のポスターがあります。ここに先の「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」の英訳があります。このポスターは下部に小さくBAPTIST BOARD OF EDUCATION, DEPARTMENT OF MISSIONARY EDUCATION, 276 Fifth Avenue, New York Cityと印刷されており、新島先生がアメリカに再び行かれた一八八四年から八五年バプテスト教会での英語の文章といわれておりますが、実際にはこれについてはわかりませんが、本人が書かれた（訳された）ものということですが、これについても定かではありません。

「人間の偉大さ」Man’s Greatnessという短いエッセイがあります。先ほど申しました新島先生が四十一歳の時に一八八四年から八五年にかけ、ヨーロッパ経由でアメリカに行かれました。その時にイタリアのトレ・ペリチェ（現在はラ・ツール）に六月二十一日から八月一日まで滞在されました。そこでは珍しく比較的のんびりした保養ができたため、エッセイとしてノートブックにいろんな思いを英語で書き残されました。その中にMan’s Greatnessというものがあります。新島先生が書かれた現物ノートが残っております。オリジナルが第七巻の三一二頁に、そのノートブックの部分があります。また先に紹介したLife and Letters of Joseph Hardy Neesimaの二一六頁に引用されており、『新島襄全集』第十巻二八四ページに北垣先生がそれを全訳なさって載っております。『新島研究』という雑誌がありまして、「人間の偉

大さ」について北垣先生が書いておられます。七八号（一九九一年五月刊）の巻頭言のところを見ていただけたらと思います。

「人間の偉大さ」北垣宗治

人間の偉大さはその人の学問にあるのではなく、自分自身にとらわれないことにあるのである。大いに学のある人は無学の人より一層利己的になりやすい。十字架上のキリストを仰ぎ見よ。キリストこそがわれらの模範である。ああキリストは何と気高く、偉大で、慈悲深く見えることか。自己を忘れ、真理の大目的のために自分自身を進んで献げようではないか。また、心から悔い改めて、謙虚になろう。これを私は人間の偉大さと呼ぶのである。（『新島襄全集』第十巻、二八四頁）

また同志社大学では『現代語で読む新島襄』（丸善、二〇〇〇年刊）という本を刊行いたしまして、その中でもこの部分の日本語訳の文章が出ています。ここで結論となりますが、英語の文章に対して日本語になおす時に、当たり前のことですが、なおされる人の意思により訳が変わってきます。注目いたしておりますのは新島先生の「偉大さ」というところで、北垣先生が指摘なさっているポイントは「自分自身にとらわれないことにあるのである」と訳しておられる所です。英語の ‘one’ s disinterestedness in self を、北垣先生は「自分自身にとらわれないことに」というふうな訳になっています。それを『現代語で読む新島襄』のところで見ますと、「私心のなさに」という訳になっています。

人の偉大さは、学識だけでなく私心のなさに現れる。多くを学んだ者は、学んでいない者よりもしばしば自己中心的になりがちである。十字架上のキリストに目を向けよう。彼が私たちの模範である。ああ、キリストはなんと高貴で、なんと偉大で、なんと恵み深く見えることだろう。私たちも自己を忘れ、真と善の大義のために自己を惜しげもなく差し出そう。また真に悔い改め、謙虚になろう。私はこれを人の偉大さと呼ぶ。

「私心のなさ」というよりは「自分自身にとらわれない」という訳の方がより適切ではないかと、私なりに解釈をいたしております。

（図4）この「自分自身にとらわれない」と訳された ‘one’ s disinterestedness in self と同じ言葉として対応するもので ‘self - forgetfulness’ という言葉がありますが、このことについてもう少し話をさせてもらいます。実はこの京田辺キャンパスの真ん中あたりにあります理化学館の階段上の梁のところに “SEEK THROUGH YOUR VOCATION TO SERVE GOD AND HUMANITY J. N. HARRIS” と書かれております。工学部が京田辺へ移ってきた際に理化学館は建設されました。当時学長をなさっていた岩山次郎先生が「天職による神と人類への献身」と訳をなさっています。この言葉はどこから採られたのかといえますと、工学部の前身ハリス理化学校設立の基金として当時のお金で十万ドルを出してくださったハリスさんが日頃若い人たちに日々おっしゃっていたとされる次の言葉があります。

“Seek through your vocation to serve God and humanity. The qualities that go into the doing of good work - patience, self - forgetfulness, a lively sense of responsibility - these also are the quality that go into the making of a good man, and without these qualities no man becomes good.” Jonathan N. Harris

この文章の最初のところが用いられました。文中に self - forgetfulness があります。新島先生の接しられたクリスチャンの方々がいとも念頭においられた考えだったように思います。工学部が京田辺キャンパスへ移転した時に大学は one’ s disinterestedness in self を意識してこの言葉を選ばれたのではないかとと思っています。ちなみに、ハリスさんの基金の一部はアメリカに残り、その果実がいまなお同志社へ送金されています。

（三）教育とオリジナル

（図5）これは『新島襄全集』の第六巻の七〇頁のところですが、オリジナルに関連して新島先生の考えを示すものと考えられる手紙を紹介したいと思います。一八六五年（二十二歳）アメリカに到着して五年後アーモスト・カレッジの時の級友で、スティムソンという方がおられますが、その方の日曜学校の生徒に日本のことを紹介するために彼に書いた英文手紙を抄訳したものです。この絵は、新島先生ご自身が筆で画かれたもので、この人物の目が切れ上がりには画かれているところを記憶しておいていただきたいと思います。この英語は新島先生が経験されたアメリカの教育の違いを意見として友人に送っておられ『新島襄全集』の第六巻の七〇頁に英文があります。それをご覧いただくと正しいのですが、訳したもので紹介しましょう。

・・・日本の子供はアメリカの子供とは比較にならないほど両親に従うようにしつけられています。何をするのも両親の許しを得ることが必要で、もしも誤ったことをしてかしたり、親に従わないことをしようものなら、ひどく叱られます。叱り方も普通たたいも差し支えないところではなくて、日本では子供の頭をたたいて叱ります。・・・（ふつうお尻とかを叩くのですが、バーンと頭を叩くのだと。）・・・勉強は書き方に重点が置かれ、読み方にはほんの少ししか時間をさきません。（ここでこういうふうにと寺子屋で習字で真似ることばかりを習うのですよと言いたいのではないかと思えます。）学んだ事を復唱（recite）することは決してせず、どう読むかという読み方を単に学ぶだけです。書き方は先生によって模範が示され、それに従って練習帳が真っ黒になるまで何回も何回も書き、一週間に練習したことをその週の終わりには清書しなくてはなりません。自分たちの国の全ての県・市・町の名前をそれらがどこにあるかを示す地図を用いなくて学びます。動物と鳥それに自然界の事物の全ての名前を学びますが、さし絵や図解は使いません・・・

ということで、「百聞は一見にしかず」という言葉がありますが、オリジナル（本物・原点）を見ることを通して自分が体験をすることをせずに、記憶だけで知識を得ていくということをおっしゃっているのではないかと思います。私はこの体験することに教育の原点をおきたいと思っています。

新島先生が当時アメリカに行かれたのは、アメリカやヨーロッパについて何の知識もなかった時代です。少しはあったかもしれませんが、私たちが現在西洋の文化について知っていることは全然違って、全く知識もなく向こうへ行かれて自分で見ながら体験し、知識を得ていかれた。ワインにしましても当時ワインというのは日本になかったのです。そうするとワインを作っているところを見て、こうやってワインを造るのだということを日記などにいっぱい書かれております。新島先生は非常に絵が上手でしたので、スケッチがいっぱい残っており絵を通してオリジナルを伝えてくださっています。『新島襄全集』にはたくさん残っています。

写真で見る新島先生

新島先生がどうやってアメリカを含めた外国で過ごされ日本に帰ってこられたかということについて、それらの写真を紹介しながら、私の話を終わりたいと思います。

（図6）最初に新島先生がアメリカに行くために函館を発たれたのは、一八六四年六月十五日といわれておりますが、この日は実は旧暦でいきますと七月十八日であります。そして上海では、船が積み荷などを換えたり貿易の仕事をし、その後地図の線のように喜望峰を通過していかれるのですが、帆船船ですからその風の流れとかを考えますと、アメリカへ帰るのに適した時期があるのでしょうか。ですから時間を潰してということになります。そしてボストンに行かれて、ボストンから日本に帰ってこられる時はアメリカを横断され、太平洋を船で帰って来られます。先ほど申しました一八八四年に二回目に出発されますが、今度はこのスエズ運河を通過して、イタリアを通過して先ほどのトレ・ペリチェです、それからスイスを通るというルートを取って二回目のボストンへ行かれました。第一回目の出発するにあたって、どうしてアメリカのことを知ったかといえますと、（図7）『ロビンソン・クルーソー』の本を読まれたことがあるらしいし、（図8）『連邦志略』という本の中で歴史を学ばれて、これが元になったということです。

（図9）英語で ‘Heavenly Father’ という言葉があります。新島先生がキリスト教に関心を持った理由として、‘Heavenly Father’ という言葉を漢訳のキリスト教パンフレットで読んだと書かれています。実際には漢訳のキリスト教のパンフレットで見られたと思われる漢字の文字を英語で ‘Heavenly Father’ と書かれた訳です。しかしそれを同志社の方が後に訳されて、「天父」という言葉が使われています。上海もしくは香港で発行のキリスト教のパンフレットというもの定かではありませんので、本当に「天父」と書いてあったかはわかりません。とにかくこの意味が書いてあって、それを新島先生は ‘Heavenly Father’ と訳されて、それが実はもう日本では「天父」となっていた訳です。多分間違いないことだと思いますが、ここから ‘Heavenly Father’ となった経緯、あるいはその元が「天父」であったかは現状ではわからないことに私は関心を持っております。

（図10）それで新島先生が上海を発する時には、ワイルド・ローヴァー号で出られたわけですが、この船の絵は二回ほど同志社の方へ来まして、最近この絵のレプリカを作ったということを見ました。三本柱の船です。実はこの絵の右下に日付けが書いてありまして、一八六四年の十二月二日で、船長さんのテイラーという名前が書かれております。この船主さんがハーディーさんです。船の絵を画くというのは船が進水した時に画くのが普通で、これは上海を発する時の絵でして、新島先生が乗っていた時の状況を示すために後で書かれた特別な絵ということになります。ひょっとして新島先生が描かれたかも知れません。

（図11）これもよくご存知かもしれませんが、脱国の三日前にロシア正教の司祭ニコライさんが、写真を撮ればと勧められて撮ったという湿版写真でこれも社史資料センターに残っています。もう暗くなっていますが、デイヴィスさんが新島先生が亡くなった時に『新島伝』というのを書かれていて、その時のイラストレーターがエッチングで描かれたのが、下の絵です。これを元に原田直二郎先生が肖像画を描かれているのが右の絵です。ちなみにニコライ司祭は後に東京へ移られ、かのお茶の水のニコライ聖堂のニコライさんです。

（図12）それから先生が函館を出発されたことはよく知られています。脱国されたのが一八六四年六月十五日といわれていますが、このように自筆の手紙に脱国の様子をスケッチとして画かれました。但しこれも実はオリジナルでなかったようです。オリジナルのように見えますが、これを描かれたのは新島公義さんといって義理の甥にあたる方が、その手帳を模写して描いたものようです。なぜそうかと言いますと、刀のさやのところが白いまま残っているのです。ところが『新島襄全集』第五巻の六九頁にこの写真があるのですが、そこでは黒く塗ってあるのです。けれど原本は残っていないようです。したがって「これおかしいな」と気がついて『新島襄全集』を出版される時にここは塗られたのだと思います

が、実際には定かではありません。これは現在模写として社史資料センターに残っているオリジナルですので、これは改ざんして作った可能性があるといわれています。この状況は新島先生が二十一歳の時に出発した時に、こういうふうにして、友人の塩田虎尾さんと一緒に沢辺数馬という方の神明社というところを出たと日記帳に書かれています。福士卯之吉と書いてありますが、ベルリン号に乗る手助けをなさった方です。このスケッチの人物の目の形も記憶しておいてください。

(図13) 先生がアーモスト・カレッジで学ばれたことはよく知られていることの一つですが、卒業の時に、こういう衣装を全部保存して持っておられて、こういう格好で私は出国してきたのですということで、アメリカで写真を撮っておられます。新島先生は写真をたくさんアメリカで撮られたのですが、必ず二枚撮られていました。右のものは左のものと少し違うのです。ちょっと横顔ですね。これは正面の顔ですね。左手でかかえられているのは大・小の刀に相当するもので、背中の荷物は風呂敷ですね。右足の背後にスタンドらしきものがありますが、これは当時の写真は露光時間が長くて動いたらぶれますので、動かないように固定するためのものです。机に触ったりして撮った写真です。社史資料センターの遺品庫に残っています。

あとは若い頃の数枚の写真を紹介します。(図14) フィリップス・アカデミー時代、二十三歳の時です。先ほど申しましたように何かに触っておられます。この時は新島七五三太で洋装の最初の写真であるかと思います。

(図15) 次の年の二十四歳の時です。ちょっと男前になっている写真ですが、左側の写真の裏書を見ていただくと、これはご両親に送っておられます。実際に手元に渡ったのはかなり後からのようです。右のものは、ベルリン号で脱国する時にお世話になった福士卯之吉さんへ送られた写真の裏書です。これは全く同じところですが、コピーを数枚作られたうちの二枚ということです。

(図16) これは二十七歳の時のアーモスト・カレッジの卒業アルバム写真です。私たちの卒業アルバムというのは集合写真ですが、当時のアーモスト・カレッジの卒業アルバム写真というのは一人ずつの写真で結構大きいA4判程度のもので、これは複数あったということで同志社の方に寄贈されまして社史資料センターにあります。

(図17) 先生はアメリカにおられる時に葉書大の「雷さん」の絵を画かれ、実物が残っております。アーモスト大学の図書館アーカイブスが所蔵しております。この「雷さん」に関しましてはアーモスト在学中に物理の静電気を習われまして、人工的に雷をおこすこととかを学んでおられますし、ジョークも言っておられます。

(図18) マサチューセッツ州セイラムのビーボディー博物館に一枚の絵があります。これは盾みたいなものに絵が描かれているのですが、この顔を見ますと先ほどの習字を書いている若者や函館出発時の切れ上がり目の人物と同じような顔です。それからこの笹の絵は新島家の家紋に似ている図柄です。北垣先生は新島作「武者の絵」とされていますが、これは本当に新島が描いたかどうかというのはまだわかっておりません。同じ顔のスタイルなので、ひょっとしてということですが、証拠にはなりません。

(図19) これは「日々爾(なんじ)乃十を取可し」(日々なんじの十字架を取るべし)と、裏には「Joseph NeeSima Day by day thy Cross take up Nitchee nitchee nanjino jyujika torubeshi」と書かれています。これもビーボディー博物館に残っているものです。

(図20) これは新島先生は脱国をしたということですが、在学中に新島七五三太は米国留学の免許を受けられ、大学で学ぶということを日本政府に認めてもらったという証拠です。

(図21) これは英文の日記の一部ですが、帰ってこられてから、新島先生は京都に来られています。その京都に来るときに大阪から奈良通って、宇治、石山、坂本の比叡山から京都に行かれた。これは横ですが、奈良の大仏殿の館の柱を当時建築のために運んでいたのでしょうね。そのスケッチです。それから大仏さんのスケッチも紹介しておきます。

(図22) なぜ新島先生が京都に関心をもっていたのかといえますと、同志社の創立に関わった山本覚馬が、京都の博覧会の開催に際し京都の地図を発行しています。京都の周辺が画かれています。このあたりを拡大いたしますと先生は比叡山からずっと降りてこられて修学院通って、三条で宿をとられた状況がわかります。この地図をご覧になったので奈良から木津川の東側通って宇治田原から京都へ行かれたのではないかというようなことを研究されている方もおられます。

(図23) 第二寮としてこのような建物がありまして、ここで最初の卒業式が行われたといわれています。国際高校の体育館ができる時に壊されて現在保存中のようです。もともと今出川にあったのを田辺のキャンパスができる前に、まずは一番最初にこの建物に移ってきたのですが、今は眠っているような状態です。

(図24) それから先生がドイツに行かれた時の三十歳の顔で、このように変わってこられています。ベルリン滞在中に撮られた写真です。

(図25) 次は京都で福士さんと再会された時の写真です。左は奥さんと結婚されて間もない頃で三十四歳の時と考えられています。これは京都の写真館で撮られたものです。福士さんとの写真は三十九歳の時で、福士さんは当時福士成豊と名前を変えておられます。五つほど新島先生より先輩で四十四歳です。この方は実は測量で有名でして、日本の測量史においては非常に著名なようです。最近出ました『新島研究』という雑誌に上西勝也氏が報告されています。

(図26) 四十一歳の時の新島先生の写真で、この二枚は同じ時なのですが、少し角度が違います。これを元にスケッチを描かれ、それを元にして切手が発行されました。これは額の傷が顕著に現れています。

(図27) 次のものは、写真と思っていたのですが、実は肖像画なのです。アメリカはこういう肖像画を上手に描く人がおられたようでして、グレース教会といって新島先生が日本に帰って来る前に演説をして寄付を集められた教会がありますが、そこに飾ってあったものです。木炭画です。ちょうど松山義則同志社大学長とケーリ先生が創立百周年を記念して一九七六年に教会を訪問された時に日本からの来客ということで教会の長老が見つけられて、壁に掛けられたようです。その後ディーン牧師が持ってこれ同志社に寄贈していただきました。現在これの複製画がいろんな所にかけてあります。もう一度申しますがこれは写真ではなく木炭画であります。このオリジナル原画が有終館の総長室にあり、グレイス教会にはそのレプリカが送られました。また、工学部でいいますと、工学部事務室の中にかかっております。

(図28) 晩年の写真の一つですが、少し変わられて、お痩せになられています。堀真澄写真師とかかれており、堀写真館が写真を撮られる場所だったようです。

(図29) これはやはり晩年の写真で四十六歳となっています。この後新島先生はアーモスト・カレッジから名誉学位をもらっておられます。アーモスト・カレッジの伝統で、卒業生が自分たちの同期の卒業生の中で一番貢献したと思う人の肖像画を作って母校に寄付するという習慣があったようなのですが、新島先生の学年の友人たちが新島先生を選びまして中央の肖像画を母校にプレゼントしました。これがジョンソン・チャペルに掛かっている肖像画ということで有名です。アメリカと日本が戦争をしている時もチャペルに掛かっていたというエピソードが残っています。その原画になる写真が左のものです。右のものは亡くなられた後、先ほど書いております「Life and Letters of Joseph NeeSima」という本の口絵で、左の写真は元に再生したエッチング画です。現在ですと私がパワーポイントを使って写真を皆さんにお見せしているのですが、当時は印刷をする時に写真を印刷することはできませんので、エッチングで写真に似せてうまく印刷する技術があったのです。それがこれです。

(図30) それからもう一つは、いつ頃の写真かわからないのですが、当時の生徒で徳富猪一郎(後の徳富蘇峰)といわれる有名な方がおられますが、その方は卒業せずに退学されたのですが、その退学時の明治十三年に新島先生が徳富さんに渡された写真で、その裏には徳富さんに書かれた文字がこれです。「大人とならんと欲せば自ら大人と思ふ勿れ」、要するに謙虚にならなさいという言葉を書かれたもので徳富さんは大事になさっていました。現在の東京都大田区立山王草堂に蘇峰さんの記念館がありますが、そこに写真の裏、表で飾っております。

写真を使って同志社大学の原点となる新島先生を紹介すると同時にオリジナルというものがいかに大切かということをお話ししました。私たち工学部の者は皆さんの独創性をいかに育てることができるかと常に考えております。オリジナルが大切だと主張しています。新島先生がおっしゃっている自治自立はこのオリジナルを大切にすることと大いに関係していると思っています。大学時代に自分を見つけられ、皆さんにしかできない社会への貢献をしてくださることを念じております

二〇〇五年四月十一日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録

※図の表示はホームページでは省略します。